こっそりと日びより和
小説 空蝉
表紙イラスト みかん。
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『いもうと日和』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

空蝉

表紙／みかん。

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

矢島(やじま)ゆきね

兄の前で恋心を隠そうともしないほどの超ブラコンの巨乳妹。幼い頃に面白がって幸の股間を弄って以来、その感触に安らぎを覚え、今ではことあるごとに触ろうとする。

矢島幸(やじまこう)

妹のゆきねの熱烈なラブラブアタックに悩む青年。兄妹間の恋愛はいけないと思いつつも、重度のシスコンで、もはや理性は崩壊寸前。

矢島幸。どこにでもある平凡なサラリーマン家庭に生まれ、幸あるようにと「幸（コウ）」と名付けられ。その割にはありふれた苦学生として私立大学に通う彼の一日の始まりは、いつも——相当に稀有で、ある意味幸せなものだった——。

「……ん、む……ん、ぁ……？」

目を覚ますと、視界が肉景色に埋もれていた。

「も、もがっ」

寝ぼけまなこを擦り起き上がりかけて、顔の上に跨がった柔肉に鼻先をぶつける。

「ひぁッ……！」

頭の上で甘い鳴き声がする。と同時に、鼻先にぶつかった柔らかな肉の塊がぶるんと揺れた。

鼻を左右から挟んでしっとりと吸いついてくる柔肉の感触は、例えるなら恐ろしく巨大なマシュマロ。思わず頬ずりしてそのまま眠りこけてしまいたくなるほど心地よくて、その上奇妙な安心感を与えてくれる。

（う～……八十九のFカップ。あいつ、また胸が大きくなってんのか……）

しかもこの、じかに伝わるぬくもりと肌の質感は、明らかにナマ乳。すりすりと絡んでくる太ももの感触と重ね合わされた股間に感じる布地面積から、相手がいつも通り、上は

前をはだけたワイシャツ一枚、下はショーツ一枚のだらしない姿なのだと悟る。
（あれだけ昨日も注意したのに。……でもこのぬくもりはちょっと、いやかなりいい……かも）
「や、やぁんっ。くすぐったいってば……ぁっ」
結局誘惑に勝てずに頬ずりしてしまい、またも頭上からの甘い声を浴びて、朝勃ちの肉棒がズクンとうめく。
今朝もいつも通り勝手に人の布団へと潜り込んだ彼女――もう十うん年も一緒に過ごしてきた少女の成長ぶりに、感無量。
「ん……んーっ。おふぁよ、コウにぃ」
幸せに浸ろうか迷っている青年の脳しょうを、さらに蕩かさんがため。まだ眠そうな、少し甘えたそぶりの声が響く。声に合わせて、また鼻先に当たる少女の乳肉が弾みながら、いっそう押しつけられてくる。
「も、もがっ。ゆ、ゆきねっ……苦、しっ」
隙間なくぺったりと押しついた巨乳に息がつまり、幸せな窒息死を迎えかける。上に乗る彼女の背をタップしながら嗅いだ乳谷のにおいは、甘ったるく、少し汗ばんで、こもった感じがした。
「えへへ。んーっ……ちゅ。おはよ、コウにぃ」

押しのけられるよりも早く身体をずらしてきて、対面で向き合う彼女――ゆきねは、首筋で揃えたボブカットを掻き上げながら、照れ笑いしつつ唇におはようのキスをくれる。
「ん……ふぁ……んちゅぅぅぅ」
「んぷ……っ、こ、こほぉら、ひた……！　れちゅりゅるるっ」
まるで通い慣れた道を往くがごとく。口内に潜り込んだゆきねの長めの舌に、隅々までなめ扱かれて、あっさりと陥落。気づけば応じるように舌を突き出し絡ませてしまっている。これも、毎朝のことだ。
「……っぷぁっ。なんでお前はいつもいつも漏れなく俺の布団に潜り込んでるんだよ。そ、それに……キ」
「キ？」
不思議そうに見つめてくるゆきねのきょとんとした表情を見ただけで、元気な股間の逸物がムクリと起き上がり。その分だけ青年は腰を引く。朝という時間もまた、股間の暴れん棒ぶりに拍車をかけていた。
「だって。おにぃをぎゅってして眠るとぐっすり眠れるんだもーん」
「もーん、じゃねぇっ。危うく窒息させられるとこだったんだぞ」
あまりにあっけらかんとした物言いに、つい「目くじら立ててる俺の方がおかしいのか？」などと思いつつも、そのおかげで若干股間のたぎりから意識が逸れ、ひと息。気を

取り直し、苦言を続ける。
「ウソウソ。コウにぃだってわたしのこと眠りながら抱き締めてきたし。それに夜、何度も胸に頬ずりしてきてくすぐったかったんだから。……嬉しかったけど」
（だぁーっ。頬染めるな。うつむくなぁ。谷間が、谷間がっ）
その、はにかんだ表情と、裸ワイシャツから覗く深い乳谷は反則だ。若く健康で、健全な男子には目の毒だ。だから――。
（俺だって、その、若い……男なんだぞ）
仮にそう素直に告げれば、きっと少女はいっそう喜んで、いじらしい姿を見せてくれる。そうなってしまってから、理性が保つ自信などあるはずもなかった。
「そ、そもそもっ。兄妹でこういうことするのはまずいんだって！」
――むにゅ！
少女を振り払おうと優しく伸ばした手が、ツンと尖る乳丘の頂上にソフトタッチする。指先をどこまでも沈める柔らかさと、ぷりぷりと弾き返す弾力感。体温よりも少し低いぬるめの温みに蕩かされ――。
「ぁんっ」
ツンと突いた指に感応し　可愛らしく啼いた妹の――女を強く感じてまた股間の間かん棒が鎌首をもたげ始める。

「うぅおおおおおおお‼　い、今のは偶然っ、不可抗力だからぁぁぁぁ――」
「あっ……逃げなくても。気持ちよかったから……もっと、していい……のにな」
少女の言葉を最後まで聞き届けることなく、青年は股間を押さえトイレへ一直線。
平々凡々なはずの苦学生の朝は、実の妹の肌の温みからいつも始まる――。

「だからだな、こういうことはもういい加減やめなさい」
抱き枕にされてびっしょり掻いた汗を流し終え、着替えついでに顔も洗った青年は、朝食の食パンにジャムを塗りつけながら妹を諭していた。
「なんで？　コウにぃはわたしのこと好きでしょ。で、わたしもコウにぃのことが大好き。ね、問題ないっしょ」
（そんな満面の笑みで言われても……）
元々きりっとした目尻が満面の笑みによって細められる。ボーイッシュな見た目の印象と、甘えたがりな妹としての顔をブレンドした、年頃の娘。兄の目からひいき目なしに見ても可愛らしい妹に微笑まれては、元々シスコンの気がある青年がこれ以上強く言い募れるはずもない。
「それに、小さい頃。『大きくなったらゆきねをお嫁さんにしてやる』って」
「そ、それはだなぁ……」

傍目にもわかるくらい表情と態度に異変が現れていたのだろう。心配そうに寄ってきてくれた店員を邪険に追い払ったのは、機嫌が悪かったからでも疎ましかったからでもなく。嫉妬したらしい妹の足指が玉袋付近へと移動し、コロコロともみ転がすように動き回ったせいだ。

（ゆ、ゆきねっ。危うくばれるところだったじゃねぇかぁっ）

男性としての機能を果たすための大事な部分。敏感な部位を足蹴にされていても、屈辱感などは感じなかった。今胸を占めているのは、秘め事がばれずに済んだ安堵と、愛しさに裏打ちされた強烈な性的快感。ただ、それだけだ。

（……だって。せっかくコウにぃと一緒にすっごくいい感じになってたのに）

木製テーブルの上。顔を寄せあい周囲に漏れぬよう小声でしたやり取りから、想像通りの妹の心情が推し量れてしまい。まるで心は子供のまま身体だけ大きくなったような妹の、あまりの単純ぶりにあきれるやら。まっすぐな愛情を与えられていることを実感できて、やはり嬉しくもあり。

「……っ、く、ぅ……ぁ！　ぁ……ぁっ」

ない交ぜの気持ちを煽るように立てた指腹で筋裏を扱き立ててきたゆきねの、巧みな足さばきに翻弄され、また甘い声が喉元にまでせり上がる。

声はどうにか抑え込めても、腰元に堆積する肉の悦びの方は、さすがに十年来のパート

えろ話のプロローグ
えろ試し読みスタート!

ナーのお手前に溺れ、少しの抑制もままならなかった。指腹に擦られ熱を溜め、溜めた熱を放散しようと肉幹が鼓動を刻む。刻まれる鼓動には快楽の塊がたっぷりと帯同して、深く腰の芯にまで響くその都度幹の内部に強烈な衝動が渦巻き、また堆積していった。

（しかもさっきの声で余計に周りの注目集めちゃってるしっ！）

「あ。すごい、いつもより硬くて、あったかぁい……」

視線を気にした分だけ、素直な肉棒は硬直し、いっそう熱を溜めて自ら窮地に誘い込まれていく。

「う、ぁ……っ、ゆきっ、ッッ！」

もっともっと触れていたい。そう言いたげに視線を重ねたきた笑顔の妹が、とうとう左足まで伸ばして肉棒を刺激する。両の足親指と人差し指でエラの張った亀頭の傘裏を挟まれて、ドクリと苛烈なしびれが腰に響いた。残りの指で幹を押さえ込まれて、もう腰を引いて逃れることすら叶わない。

彷徨う視線がまた気持ち前かがみになった少女の豊かすぎる柔乳の深い深い谷間へと行き着いて、目線までもが囚われて、とうとう身じろぎひとつできなくなる。

「……おにぃ。わたしが食べてる間も、胸の谷間……見てた、よね？」

「〜〜〜っ⁉　お、おまっ、気づいっ」

吐息混じりの妹の発言に、一転。心臓をわしづかみにされた。

「熱心に、鼻息荒くして見てるんだもん。そりゃ気づく、ぁん……よぉっ」
前髪をくすぐる微風に誘われ見上げた彼女の表情は、うっとりと嬉しそうに蕩け頬まで染めてはにかんでいて。微風――兄に負けず劣らず乱れた妹の鼻息に合わせて、不規則に加わる足裏の圧力に犯され、牡肉が甘い声を漏らすように長く、ひときわ強く打ち震えた。
「……嬉しかった」
ダメ押しのひとことに後押しされて、一気に腰の芯が熱を増す。
(や、ばぃ……これ、で、出るっ……!)
まだいくつかの視線がこちらに向いていた。興味深そうに見る者、中には「あの子可愛くね?」などと無遠慮にゆきねを指して話す者までいて――幸の胸に、肉の悦びと強い独占欲とが交互に燃え盛る。
「や……ぁん。おにぃの触ってるだけで、濡れてきちゃったよぅ……」
くちゅぅっ……。
「……ッッ!」
吸い寄せられるようにして頭を無理矢理かがめ覗き見た、テーブルの下。両脚を膝を折り曲げて伸ばし、ややガニ股気味に開いた正面の股間を覆う、ホットパンツの隙間から。
(ピン、ク……)
淡い桃色のレース下着が、しっとりと湿って股肉にへばりついているのが見えた。

ドクンッ――！

右胸の奥と腰の芯で、同時に動悸が高鳴って。無自覚な妹によるこの上ない引き留めに、もう腰を上げようという気すら起こらなくなる。

それどころか、知らず知らずのうちに青年は腰を前に突き出し、より妹が脚愛撫をしやすいよう、より強い肉欲を自分が得られるように動いてしまっていた。

「ふぅ、ぁ……すごぉい。まだ、大きくなる……んだぁ……」

「っんなもん見せられて……我慢できるわけないだろっ」

生唾を呑んで瞳潤ませる妹に、せめてもの抵抗と毒づいてみせる。

「おにぃの目、すごくギラギラしてるよ……わたしのアソコにチリチリってぶつかって、火照っちゃってるぅぅ……っ」

兄が腰を揺すれば、妹もまた濡れた下着を覗かせながら安産型の丸い尻肉を震わせた。

（早く済ませるのが最良なんだっ。だからっ、ぅぅっ、だからぁぁっ）

今はとにかく妹の足奉仕に集中して、与えられる肉快楽に溺れてしまおう――。決断してしまえば、後に残るのは「愛しい人に愛撫されている」がゆえの最上の甘美だけだった。

「ヌルヌルがたくさん出てきた……ね。わ、わたしのも、もぅっ……ぁぁんっ」

どうにか声を抑えながら、兄にだけ聞こえる声量で甘く妹が啼く。もじつく彼女の股根で響くネトついた淫液の音色と、ほのかに漂う淫らな香り。

「ほ、ほら。もうこんなにぃ……っ」
「んぶっ⁉」
ゆきねが自らの指先ですくい取った蜜液を兄の口元になすりつけてくる。
「ゆき……んぢゅるっ。れちゅ……ちぅぅっ」
いっそう濃くなった甘みと爛れたにおいに魅了され、また股間で幹が膨れ上がりながら鼓動を刻む。周りの視線を集めてしまう。そのことに思い至るよりも先に、心のままに、淫靡な粘濁音を響かせて妹の指に絡まる蜜を啜って、嚥下していた。
幹を指で押されるたび、妹の足裏や指の間に大量の先走りを、しびれるような歓喜とともに吐き出し。ゆきねの指に絡む淫汁を、一滴も残さずなめしゃぶる。最愛の存在に自分を刻んでいく。その甘美を兄妹揃って貪って、ゾクゾクと背筋を駆け上がる最後の予兆にも同時に仲良く股間を突き出した。
「カリっ……もう、そろそろイク、からっ。頼むっ……」
「うんっ。ん……ンンっ！　わたっ、しもぉっ。おにぃ、触って……！　足でいいから、わたしのっ、もぉっ……ひぁあぁぁんっ！」
最後まで言われずとも理解している。妹の足指がカリ裏を挟むのと同時に、急いで靴を脱ぎ伸ばした兄の右足がホットパンツの股布に着地した。グチリと湿った感触が足指に伝わる。妹の愛情の証に触れているのだ。そう思うほどにますますカリ首に血が集まり、過

敏さを増しに増したその結果。絶妙な圧迫を加える妹の足技にますますのめり込み、溺れてゆく。

ぬぢっ！　にゅっ、にゅりゅるっ！　ぬぢゅりゅぅっ！

「ぁ、ぁっ……！　おにぃっ、コウにぃっ、気持ち、ぃ……よぉっ。飛んじゃ、うぅぅ」

ぬめった下着に染み込んだ蜜を押し出すように、ホットパンツ一枚隔てた向こうから擦り立てる。兄である自分が、幼い頃から見つめてきた妹の快楽を引き出している。そんな背徳的な喜悦と、震える妹の股間から伝わる温みとが重なって、昂奮は天井知らずに高まっていった。

にゅりゅっ！　にぢゃぬりゅりゅぅっ！　にゅぢっ！　にゅぢゅるっ！

「あぁ、俺もっ、もうっ……！」

悶えながらも足指で亀頭を挟み、もう一方の足で幹を扱き立てて離さない妹の巧みな刺激に、背筋を歓喜が奔り抜けてゆく。

「一緒にっ、一緒にっ、イこ？　ねっ……んぁ、ぁっ、ぁぁっ……～～～！」

甘い誘いをはねのける理性も、理由も、もうない。

心と身体のつながりを求めるように、どちらからともなく重ねた手と手を絡めあう。ひじからの震えが伝わった木製テーブルが揺れて予想外に大きな音を立て、また、周囲の視線を惹いてしまう。

初めての経験。腰を突き抜けていく快楽の苛烈ぶりに慄きつつも、ゆきねは逃げることなく、逆にいっそう強く抱きついて結合を求めてくる。兄も負けじと腰を押しつけ、お返しにと押しつけられた乳肉の外周を腋付近まで、それこそ滴るほどに唾液をまぶしなめ上げた。

「ゃあはっ！　くすぐったいって、ば……あ、ぁぁっ……ン！　ちょっと、うぅんおにぃの舌すごくエッチっぽいっ、ひっ！　あ、あぁぁー……っ」

唾液でベトベトに濡れて光る乳肉があまりに美味しそうで、つい軽く歯を立て甘噛みしてしまう。滴る唾液がまるでミルクのように思えてきて、乳を搾るようにチュウチュウと強く乳頭を吸い立てもした。

「な、なんかむずむずするの、どんどんっ、広がってきてっ、る……よぉっ！」

乳への愛撫が功を奏したのか。すでにドロドロに濡れそぼった秘処に血の跡もなく、蜜液を潤滑油にヌルついた肉ヒダがうねっては肉棒が食み尽くされてゆく。

（や、ばっ……これ、このまま……じゃ）

腰の根元からせり上がる絶頂の予兆。頭の芯まで真っ白に染まるほどの強烈な高みの予感を覚えた途端。同時に妹の膣肉もキュンキュンと痙攣を強めていることに気づく。

「お、にぃっ……ごめん、ね。わたしっ、も、もぉっ」

ぐちゅんっ！

BL（ボーイズラブ）読み放題 ためし読み

「うぉぁっ！」
妹の腰が淫らにグラインドし、思わず噛んでいた乳頭を離し喘いだ。掻き混ぜられた蜜の浅ましく濁った音色と、澄んだ甲高い嬌声。相反するようでいて見事に重なった二重奏に当てられて甘くしびれた肉幹へと絡みつく、陰唇のぬめった感触にまたいっそうの肉欲が絞り出されてゆく。
「も、我慢……できなっ……のぉっ」
ばちゅんっ！
「は、おぉっ……!!」
抱きつき跨がる妹の腰がヌラリと引き抜かれた――その寂寥と摩擦の肉悦に陶酔する暇もなく。間断せずに勢いよく打ち下ろされた尻肉のもっちりとした触れ心地に溺れる。
うねる膣肉に呑み込まれていく肉幹がまるで貪り食われているようで――幹に滴る蜜液が妹のよだれであるかのごとく錯覚してしまう。
「ゆきっ、ねぇっ……」
名を呼んだ瞬間、無数に折り重なる肉ヒダに歓待されていた幹にようやくズクズクと甘苦しい衝動が拡がった。
「う、んっ！　おにっ、コウにぃっ」
呼ばれた彼女の内部も一気にぬめりを増して、後から後から湧いて出る蜜を絡めて混ぜ

るように、肉幹と肉ヒダとが絡まりあい、刺激を与えあっていく。
ぐぶぢゅうっ！
「きゃぁぁっ！　あ、はぁぁぁっ……お、にぃっ、今……のぉ」
真下から予告なしに打ちすえた。突かれた子宮が亀頭にぴったり貼りつき、歓喜の吸引でもって精を絞り取ろうと蠢動する。
「はぁ……っ、ぢゅぶっ」
美味そうに目の前に垂れ下がり揺れていた豊乳へと口づける。
「ひぃぁっあぁぁっ、そ、こぉっ。感じすぎちゃ、ぅからぁぁっ」
右乳首を食まれ煩悶する肢体を抱き締めて放さない。そうしておいていっそう強く乳首を甘噛みし、舌先で転がして唾液を塗り込め、勃起を確かめるように何度も押し潰して刺激する。
「お、にっ、んひゃっ、ぁぁっ、そのっ、下のほっ……もぉっ」
何かをねだるようにくねる妹の腰使いに、もはや羞恥などは欠片もない。派手に左右前後へとずり動き、震えながら引き抜いた腰を打ちつけて、擦れた股間同士の摩擦に悶え狂う。ぶつかった肉同士が震える、その振動にすら腰の芯を打ち抜かれて止まらなくなる。
「こ……ぉのっ。負けてられるかっ……ぁぁっ」
ただ愛しい相手と快楽を貪るための淫らで卑しい腰使いに、兄の心身もまた引き寄せら

れてゆく。
どぢゅっ！　ぢゅぶぶぶ！　ぢゅごっ！　にゅぢゅぶっ！　ぶぢゅうぅぅッッ！
「ひっ、くふぅぅぅ！　そ、そぉっ、もっとぉっ！　おにぃで中っ、いっぱいにっ、しっ、ひてぇぇぇっ！」
（あぁ、いくらでも……ずっとずっとこうしててやるっ！）
もっと、もっとして――潤んで見える妹の瞳までもがそう請うているように思え、左右交互に乳を吸い立てながら繰り返し、繰り返し腰を打ちつけてやる。
その都度応じて甘い声を響かせる妹の、熱く惚けた喘ぎを聞くたび。蜜まみれの柔肉の収縮が強まり引き絞られ、男根に甘美な衝撃が奔り抜けていく。
ぢゅりゅぅっ……ずぶぶっ！　にゅぶ、ぢゅぅぅぅ！
相手を束縛するかのように腕を、脚を絡ませ求めあう。掛け布団を蹴り上げて剥がし、こもりにこもった熱を発散しながら、角度を変え、深さを変えて腰を押し込み、上に乗る妹の膣内の感触を愉しんだ。
「ひゃ……っ、ぁあぁひ、んんっ！　んぅっ、ぅぁぁ……おにっ、いっ、深っ……あはやぁぁぁっぁあァ！」
胎の底にまで剛直を押し込まれ、女の芯で兄の形を覚えながら妹が啼く。反らした彼女の背を幸の左腕が力強く抱き寄せ引き戻す。反動が加わったことでさらに結合は深められ、

悶えたゆきねの側から積極的に尻がくねりながら押しつけられて、グチグチと卑しい音色が響き渡る。
「コウっ……にぃ、好きっ、好きぃっ……」
初めて愛しい相手に抱かれ、女としての悦びに溺れる少女の尻穴がヒクヒク蠢き、吸われこねくられる両乳首がいっそう硬く尖り立っていき――乱れる二人の吐息が、たがいの鼻先に吹きかかった。
「～～～ッッ！　っ、ぁ……ぐ、ぅっ！　ゆき、ねぇっ」
背筋から力みくぼめた尻を伝って、脳裏を真っ白に染め抜くほど強烈な甘美が迫り出してくる。請うように見た視線の先で、妹もまた最後の、最大の高みの予兆に震え、潤む瞳と濡れた唇を押しつけてきた。
「んっ……んんぅぅっ！　ぷぁっ、ぁっ、おにぃっ、一緒につ、ねっ……？　いっ、しょ、にぃっ……！」
「ああっ、わかってる、ッッ！」
ぢゅにゅぶぶぶ！　ぬぼっ！　ぬぼぶっ！　ぶぢゅぢゅぼぶぶっ！
引き攣る無数のヒダで幹をくすぐりながらギュウギュウと締まり続ける膣壁を、引き剥がすように掻き混ぜ、突きまくり、また絡みつかれて喜悦を搾り取られる。腕と脚と、生殖器に加えて、唇と舌も絡ませ、汗を、唾液を、蜜液を攪拌し、啜りあう。

「んぢゅっ！　ぢゅるるるっ！　ぇはぁぁぁっ……ぁひぁぁぁんッ！　おにっ、すごいのっ、きちゃっ……んぢゅうううっ！」

（放さないからっ、大丈夫だからっ、ぁぁぁぁっ！）

未知の高みに怯えるみたいに抱きついてキスをねだってきた、愛しい妹の髪を梳きながら頭を掻き抱き、ズポズポ浅ましい音色を立てながら腰を振る。

尻から頭の芯まで突き抜ける肉の悦楽を甘受し、とうに感覚をなくした腰の中心で、ただしびれを伴う愛しさだけがジンジンと響いていて――。

「れりゅ、んふぅぁ……っぷぁ、あひぁぁぁっ！　んぁっ！　あっ、ひっ、いっあくぅうぅぅ～～～ッ！　コウにっ、好っ……んぢゅうううううっ！」

妹の脚が離れることを拒むように兄の膝裏にしがみついた。直後、獣のように嘶く嬌声を隠すため強く、強く唇を吸い立てられ、同時に腰の芯からも甘美が絞り出されてゆく。

――ど、びゅぶりゅうぅぅっ！

「んぶっうぅぅぅ！　～～～～っ!!」

身体がひとりでに震え出し、真上に押し出た腰の先端――目一杯拡がった肉のエラの割れ目から、白く、濃く濁った子種が噴き上がる。

どぐっ！　びゅっぶびょりゅるる！　どふっびゅぶぶびびゅりゅるるぅ――――ッ！

「ひぁッッ！　や、ぁひっ！　んくぅぅぅっ！　ちゅっ、ちぅぅっ！　れちゅっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/